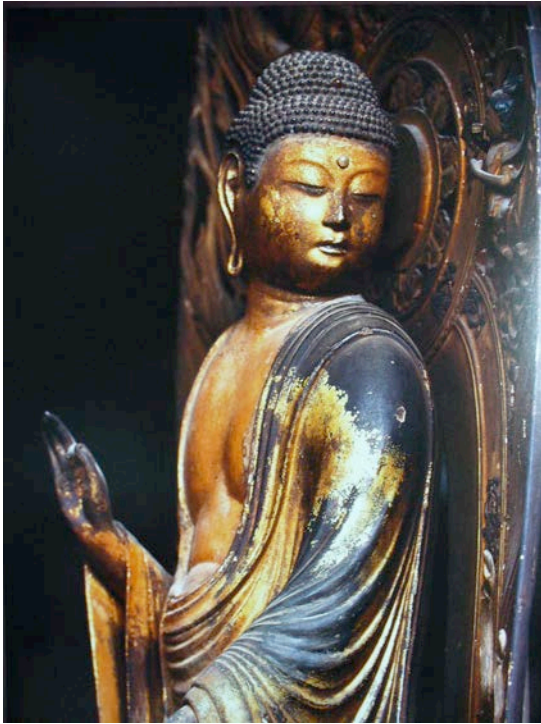




永観の文化学



近本 謙介（文化人類学）

永観（1033～1111）という僧侶を知っていますか。『往生拾因』や『往生講式』の名が浮かんだ君は、思想史や日本史がきっと好きですね。写真の「見返り阿弥陀像」（禅林寺）を想起した美術史好きの君は、京都の旅が印象深かったことでしょう。この珍しい像容は、念仏を唱えながら行道する永観を先導しつつ、「永観おそし」と言って振り返った姿とされています。東大寺で修学を積み、深い浄土信仰のあった永観は、禅林寺に隠棲して念仏修行に励みました。

そんな永観に、白河院が東大寺別当（長官）への就任を要請します。永観は官職に興味がないと皆は思っていたので、この要請の承諾は意外でした。永観は、東大寺の修造に努めた後、2年余りですぐに職を辞しました。人々は、「寺の破れたる事を、此の人ならでは心やすく沙汰すべき人も無しとおぼしめして仰せ付けけるを、律師も心得給ひたりけるなむめり」と思ったようです（鴨長明『発心集』）。つまりこの説話は、

白河院と永観律師との阿吽の呼吸を語っているわけです。永観が東大寺別当として修造に功のあったことは史実ですから、長明の綴る文学と歴史学の世界は共鳴しています。さらに、『千載和歌集』釈教部末尾が、「往生講の式書き侍ける時、教化の歌とてよみ侍ける」の詞書を持つ「みな人を渡さむと思ふ心こそ極楽に行くしるべなりけれ」という永観の詠歌であることに、いま心揺すられる君は、すでに思想史と文学を併せ学ぶ扉の前に立っていますよ。

この永観の貴重な典籍の存在を伝える目録や資料が、真福寺宝生院文庫（名古屋市大須観音）に蔵されています。名古屋大学の文化人類学では、宗教テキスト学の観点からその蔵書調査を進め、諸領域を包摂した文化学を紡ぎ出す研究を展開しています。書が伝える知とひとのかかわりを探究する学問は、君の求めているものではありませんか。

分野・専門紹介—File13

ジェンダーを知っていますか？

分野・専門名：ジェンダー学

皆さんはジェンダーという言葉聞いたことがありますか？ その意味を知っていますか？

辞書などでは、「生物学的な性差に対し、社会的・文化的に構築された性差」と説明されています。平易に言えば、「男なら泣くな」「女性なら仕事をしていても家庭のことをきちんとやらなくては」のような、なぜかと問われても説得的に答えることが難しい、性に対する特徴づけとなりましょうか。もし皆さんがジェンダーを知らなかったり、意識したことがなくて



も、例えば「女子力」「育メン」といった語について考えを巡らせば、それらが現代日本のジェンダーを反映していることに気づかれるのではないのでしょうか。他にも、皆さんの身近にジェンダーを見つけられると思います。

さらに視野を広げて、世界に目を向けても、ジェンダーに起因した「問題」が数限りなく指摘されています - 日本を含む多くの国や国際機関に依然として「ガラスの天井」が存在していることはデータが証明していますし、2014年に17歳でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんが訴えているのも広くジェンダー平等と言えましょう。

そして最近では、そもそも「性」自体について、男/女といわば単純に二分しうるものではなく、身体と心双方をめぐって多様であることが明らかにされ、徐々にですが知られるようになってきています。

こうした「性」を切り口に、社会や、その有り様を投影した様々なジャンルの作品を研究しているのがジェンダー学分野です。学部ゼミは残念ながらありませんが、大学院ゼミには日本のみならず、海外からも多くの学生が集まっています。2017年秋には大学内に「ジェンダー・リサーチ・ライブラリ」が開館し、研究環境がより充実します。
(新井 美佐子・准教授)

分野・専門紹介—File14

思いがけない楽しみ—マールバッハのドイツ文学資料館

分野・専門名：ドイツ語ドイツ文学

シュトゥットガルト近郊の小都市マールバッハは、ドイツの文豪フリードリヒ・シラーの生まれた町として有名です。石畳の、かなりきつい坂道を登ると、高台にある旧市街の広場に着きます。そこを通り抜けてしばらく歩くと、広い緑の敷地に、近代文学博物館、シラー国立博物館、ドイツ文学資料館という三つの大きな建物が建っています。

このうち、ドイツ文学資料館は、文学アーカイヴとして世界屈指の規模を誇り、ドイツ語圏の文学や文化を研究する世界中の研究者がお世話になるところです。厳重に管理された建物の中には、ドイツの作家たちに関する膨大な資料が収められていて、貴重な手稿や遺稿も保管されています。明治以来の文化交流の活発さを反映して、日本人の資料もあります。ドイツに留学経験のある森鷗外や、哲学者の九鬼周造の手紙などですね。ドイツ文学・文化研究といっても、全集や研究書を読むばかりではありません。作家が創作ノートに貼り付けた珍しい写真にドキドキしたり、読めない書き込みに頭をひねったりしながら、思いがけなく開けてくる視野を楽しむのも、研究の醍醐味の一つです。

ドイツ語ドイツ文学分野では、18世紀から現代に至るドイツ近現代文学についての研究のほか、哲学、現代思想、書籍史、舞台芸術など、ドイツ語圏の様々な文化的側面に関する研究が行われています。学生の研究テーマも、ゲーテ、グリム、カフカなどの文学研究のほか、映画研究に取り組む学生もいます。長い文化的伝統を持ち、今なおEUの中心的存在であるドイツ。そんなドイツ語圏の文学や文化を研究してみませんか。(資料館敷地に立つシラー像)
(山口 庸子・准教授)



最近の文学部

急に寒くなりました。

今年は急な冷え込みと長雨で、風邪を引いている学生や教員が目立ちます。季節はずれの台風を気にしながらの編集作業中です。1年生向けの研究室ガイダンスや卒論題目提出など行事の続くこの時期。被害の少ないことを祈っています。(YK 記)